様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：17101
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：　2010　～　2011
課題番号：２２８２００４３
研究課題名（和文）　平安文学の江戸時代における享受の研究

研究課題名（英文）　Features of Heian literature emerged from the commentaries in the Edo period

研究代表者
沼尻　利通（NUMAJIRI TOSHIMICHI）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90587635

研究成果の概要（和文）：『源氏物語』『枕草子』などの平安時代の文学作品が、江戸時代にどのように受容されたのかを明らかにするための基礎固めの研究をおこなった。具体的には、江戸時代に公刊された『源氏物語』『枕草子』の注釈書の本文の特徴を究明すること、また、『源氏物語』『枕草子』の江戸時代の注釈書は、中世や近代の注釈書とどのような差異があり、特徴があるのか、を明らかにすることに主眼を置いた。

研究成果の概要（英文）：This study presents the basic features regarding how major literatures in the Heian period, i.e., *Genjimonogatari* and *Makuranosoushi*, were read by the intellectual in the Edo period. First, features of the commentaries on these literatures made in the Edo period are summarized.Then the differences between these commentaries and those made in medieval times and modernization are highlighted through the inter-comparison.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 22 年度	1,210,000	363,000	1,573,000
平成 23 年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学

１．研究開始当初の背景

『源氏物語』『枕草子』の江戸時代の本文に関する研究は、意外なほど研究されていなかった。『源氏物語』の江戸時代の版本の研究は清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、2003 年）がすばらしい成果を残しているが、本文の細やかな異同などについては研究対象としてはいない。『枕草子』の江戸時代の注釈書の本文については、鈴木知太郎「枕草子諸板本の本文の成立」（『平安時代文学論叢』笠間書院、1968 年）が大まかな道筋を示しているが、細やかな異同については触れていなかった。総論はあるが、各論がない状態であった。

また、『源氏物語』の江戸時代を代表する注釈書である『湖月抄』については、野村貴次により、八尾版と吉田版の二種類が指摘されるにとどまっていた（野村貴次「湖月抄」「武蔵野文学」第二一集　一九七三年一二月）。

２．研究の目的

『源氏物語』『枕草子』などの平安時代の文

学作品が、江戸時代にどのように受容されたのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、江戸時代に刊行された『源氏物語』『枕草子』の本文の微細な動態を明らかにすることである。

３．研究の方法

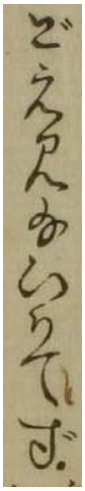
『源氏物語』は、江戸時代の『絵入源氏物語』の三種類（慶安本・万治本・無刊記小本）の本文を翻刻、比較していき、その異同をあぶりだす方法をとった。また『源氏物語』の江戸時代を代表する『湖月抄』の初摺（八尾版）と後摺（吉田版）のそれぞれの版面を比較し、異同があるか確認していった。『枕草子』の江戸時代の注釈書『枕草子抄』の章段区分方法と、現代の章段区分方法を比較し、『枕草子抄』の章段区分方法の特異点を明らかにする方法をとった。これらの方法はすべて文献学的手法によった。

４．研究成果

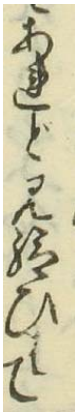
『絵入源氏物語』の三種類の本文を比較する研究の成果について記していきたい。まずは、『絵入源氏物語』三種類の表記の異同であるが、万治本は漢字を多用する傾向があること、無刊記小本はひらがなを多用する傾向があることを明らかにした。また、万治本は慶安本をある程度忠実に写したことが明らかになり、それに対して無刊記小本は本文を校訂する傾向があることが明らかになった。その校訂の傾向は、文献的根拠のない校訂と、文献的根拠のある校訂という二つの傾向がある。具体的に、校訂箇所を示すと、

慶安本　万治本　小本

11 丁オ



9 丁ウ



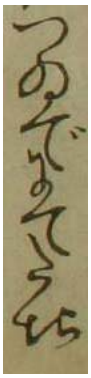
11 丁オ

とあるところは、慶安本、万治本「え見給はてず」（慶安本 11 オ、万治本 9 ウ）となっているが、小本では「え」が削除されている（小本 11 オ）。『絵入源氏物語』より先行する古活字本や整版本などは、すべて慶安本、万治本のような「え見給はてず」となっており、小本のような「え」を削除した本文はない。このような、文献的な根拠のない校訂は、ほかにも二例ある。慶安本、万治本で「いだしたて侍しを」（慶安本 12 オ、万治本 10 ウ）とあるところが、小本では「いだし侍しを」（12 オ）となっており「たて」が削除されている。また、慶安本、万治本で「うしろみをするなん」（慶安本 20 オ、万治本 18 ウ）が、小本では「うしろみ／するなん」（小本 20 オ～ウ）と「を」が削除されている。この小本の場合は「うしろみ」までが 20 丁オで、改行されて「するなん」が 20 丁ウに続いており、あいだの「を」を落としてしまったのかもしれない。いずれにせよ、これらの例を見ると、先行する他本は慶安本、万治本と同じ本文であり、小本は孤立するのである。これらの例は、どれもが助詞の削除などで、小さな異同ではある。また、文脈が変わってしまうほどの異同ではない。あるいは、小本は「読みやすくする」という意識から、助詞などを除去していると推測できる。

こうした文献的な根拠のない異同ばかりではなく、小本が何らかの先行する文献によって校訂しているらしい箇所も確認できる。慶安本、万治本ともに「つゐでにてたちより給し物を」（慶安本 11 ウ、万治本 10 ウ）との箇所がある。

慶安本　万治本　小本

11 丁ウ



10 ウ

11 丁ウ

ここに該当する小本の本文は、「つゐでにの

みたちより給し物」（11 ウ）であり、「のみ」が付け加えられている。この箇所を小本と同じ「のみ」がある本文は、古活字本の寛永中刊本一種や九大古活字本、湖月抄などがあげられる。もしも小本が、慶安本か万治本をそっくりそのまま写したとしたら、ありえない現象である。小本は、慶安本を写したことは間違いがないが、何らかの別の本に拠って校訂していると考えられる。

こうした性格の小本の異同は、この他に五ヶ所ほど確認できる。小本の 20 丁ウ「いとゝかたき世」、21 丁ウ「はゝきさきあなおそろしや」、24 丁オ「かへておりてはいし奉り給さまに」、25 丁オ「ありつる　むかしの」、27 丁ウ「おほいとのには二三日」などの箇所である。これらの箇所は、どれも慶安本や万治本と食い違いを生じており、また小本と同じ本文が、古活字本や整版本などに確認できるのである。こうした現象から、小本は慶安本を写したさいに、何らかの別の本によって校訂したと考えるべきであることがわかる。

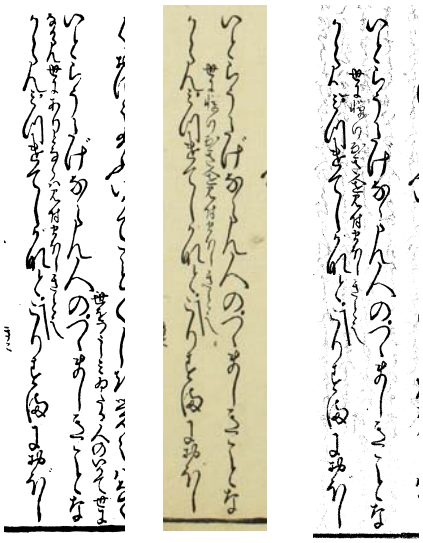
もちろん、この用例は、「桐壺」巻からのものであり、源氏物語全体を精査したものではない。今後は、別の巻を研究の対象とし、データを積み上げていく必要がある。

次に、『湖月抄』の八尾版の研究結果を記していきたい。『湖月抄』は、八尾版と吉田版があり、このうち八尾版が初摺であると考えられていた。本研究では、八尾版について詳しく調査したが、その結果、八尾版にもいくつか種類があることがわかった。

まずは、八尾版と吉田版の違いであるが、これについては「夢浮橋」巻の巻末刊記、および「葵」巻の 25 丁ウにおける埋木訂正が既に野村貴次により言及されている。これ以外の異同箇所をあぶりだす必要がある。

本研究における調査で、いくつか異同を確認した。いくつかを具体的に示していきたい。「末摘花」巻の 2 丁オの 7～8 行目の傍記である。

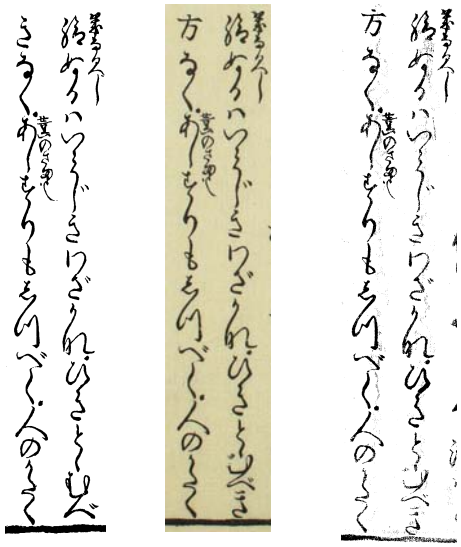
八尾版Ａ　八尾版Ｂ　吉田版



この箇所の傍注が、八尾版Ａ（野村本。新典社の北村季吟古注釈集成による）、八尾版Ｂ（早稲田大学本）では食い違う。八尾版Ｂは、吉田版（福岡教育大学本）と同じである。もし、八尾版が同じものであるならば、この箇所は八尾版Ａと八尾版Ｂが同一のものになるはずである。とすると、八尾版はＡが原形で、この箇所を削除して、Ｂになり、それが吉田版になった、と考えるべきであろう。

同じように、八尾版同士で食い違う箇所を示す。「総角」巻の 86 丁オの 6～7 行目である。

八尾版Ａ　八尾版Ｂ　吉田版



6 行目から 7 行目にかけて、八尾版Ａでは「むべ／きなく」となっており、八尾版Ｂと吉田版はともに「むべき／方なく」となっている。これは明らかに埋木による訂正がなされている。そして、その訂正は、八尾版の段階でおこなわれていると考えられる。

こうして見ていくと、八尾版は八尾版でも、どうやらいくつかの種類があるらしいことがわかる。

本研究の調査によって、八尾版Ａと同じものは、岡山大学附属図書館池田文庫本や、大阪府立大学附属図書館本（大阪女子大学旧蔵本）などが確認できた。さらに、東海大学附属図書館桃園文庫本や、一橋大学附属図書館本などでは、こうした訂正の途中のものと思われる八尾版も確認できた。調査した範囲で言えば、八尾版Ｂのものが圧倒的に多い。この種類のものが、一般に売り立てられたもので、八尾版Ａは、大名家などに献上されたものではないかと推測している。

ただ、まだ未調査の八尾版もあるため、今後も調査を続けていく必要がある。

次に、枕草子の江戸時代の注釈書の研究について述べていきたい。本研究では、加藤磐斎『枕草子抄』の章段区分方法の独自性を究明した。加藤磐斎の『枕草子抄』は、段−節−章という構造によって、章段を認識している

（沼尻利通「『清少納言枕草子抄』の章段区分方法」「日本文学」第59巻第5号　2010年5月）。本研究では、加藤磐斎の章段区分を、田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫）の章段区分と対照し、一覧にした（沼尻利通「『清少納言枕草子抄』章段区分対照表」「物語文学論究」、第13号）。これによって、加藤磐斎の章段区分と、現在の章段区分がどのように食い違うのかを示すことができた。

また、加藤磐斎『枕草子抄』と北村季吟『春曙抄』の底本については、ある時期、加藤磐斎と北村季吟が枕草子を共同で研究していた可能性があり、その研究成果が反映したものではないかという仮説を提示できた（沼尻利通「『清少納言枕草子抄』と『枕草子春曙抄』の本文」「枕草子　創造と新生」（翰林書房））。

今後は、北村季吟『春曙抄』の章段区分方法の考察、および、三巻本の写本の章段区分方法などに考察を発展させていくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①沼尻利通、『清少納言枕草子抄』章段区分対照表、物語文学論究、査読無、第13号、2011、P237－255
②沼尻利通、『清少納言枕草子抄』と『枕草子春曙抄』の本文、枕草子　創造と新生（翰林書房）、査読無、2011、P234－267

〔学会発表〕（計１件）
①沼尻利通、絵入源氏物語三種の本文異同―「桐壺」巻から―、國學院大學国文学会秋季大会、2011年10月30日、國學院大學

６．研究組織
(1)研究代表者
沼尻　利通（NUMAJIRI　TOSHIMICHI）
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90587635